

全部「親のせい」の呪縛から解き放たれよう

園長 野中 泉

私には、33歳、30歳、27歳の3人の子どもたちがいます。結婚して子どもがいる息子もいますから、子どもというには、もう大きすぎるかもしれません。でも、それであっても息子や、娘の「できていない」ことや「つまづき」を目にすると、私はいまだに「私の育て方が悪かったのかしら」という思考に陥りそうになります。アトムでさんざん、お父さん、お母さんたちに「子育ては親の手柄でも、せいでもない」と言っているくせにと自分はどうなのかと、自分自身に問うことも一度や二度ではないのです。

脳科学者の中野信子さんという方をご存知の方も多いと思いますが、彼女のお話で興味深くメモに残していた言葉があります。「子育ての努力の罠」と中野氏は表現されていたのですが、それはこんなお話をした。「子どもの面倒をみると、子育てを一生懸命努力している人ほど、そんなふうに頑張っている自分は正しいと思ってしまいます。でもそうなると、例えば自分が楽をしているときとか、誰かにに子どもを預けている時には罪悪感を感じてしまうなんてことにもなりかねません。実は、それこそが『努力の罠』なんですね。いつの間にか「努力すること」「頑張って子育てしていること」が正しくなってしまっている。でも本来は子どもがいきいきと、ちゃんと育っていくことを目指していたはずですよね。だから、努力して我慢していることがすばらしいという罠から、どうぞ自分を解放してあげてほしいと思います」。実際、5月に初めての試みとして行った夜間保育利用の親たちの懇談会でも「長時間、夜間まで子どもを預けることには最初は親として罪悪感もあった」とほとんどの親たちが口をそろえて言っていたことも思い出します。

去年のみかん組さんに、自分の正しさを曲げられずお友達と毎日のようにけんかをしていた男の子がいました。そのお母さんが懇談会で「トラブルばかりの子どもの親として、他の保護者にどう思われているだろうと考えると怖くて、懇談会に出づらくなっていた」と涙ながらに正直な胸の内を語ってくれたのですが、彼女のように思うお母さんは少なくありません。でも、その度に思います。私たち親がとらわれていること、怖がっていることの正体は、いったい何なのだろうかと。

ピカピカアトムっ子まつりの園長挨拶でも言わせてもらいましたが、先日アトムの卒園児の中高生が関わっている地域トラブルがありました。トラブルの渦中で周囲の大人のほとんどが「親が出てこい」「親がちゃんとしつけろ」と責め立てる空気の中、当事者の母親はただただ頭を下げるばかりだったのですが、その中にいたひとりの他所のお父さんが「あいつらの言い分にも一理ある」と言ってくれました。また、別のお父さんはふてくされる思春期の彼にあかんことはあかんと諭してくれた上で「でも、ちゃんと自分の思いを言えば、わかってくれる大人もいるで」とおだやかに語りかけてくれていて、その度に涙するお母さんと一緒に、私も胸がいっぱいになりました。

私たちが怖いと思っているものの向こう側には、何か問題がおこったら、個人の責任だと責め立てる社会があります。でも、思うのです。私たちもまた、そんな社会をつくっている一員であると同時に「そんな社会はやっぱり嫌だ」と考える大人にもなれる、そんなひとりでもあるはずなのです。